

幸福の赤いサクランボ



今シーズンのサクランボの出荷は、予定通り8月20日にすべて終了した。

当農園では5年前の2011年から、長期保存して8月20日ごろまで販売できるオリジナルブランド「紅姫」を出荷している。その紅姫をブランド化するために、農園を法人化し、約5千万円の設備投資をすると決断したのは09年だった。

当時、私はサクランボの生産・販売について、高品質を維持しながら



消毒作業を終え、サクランボの苗木を確認する安食政史さん。8月31日午前、山辺町

頼りがいある後継者が育った

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2.7畧のサクランボ園を経営する。

規模と出荷期間を広げ、売上額を5年ごとに倍増させていく計画を立てていた。十分、達成可能だと考えていた。

しかし周囲の多くの方からは、後継者がいないまま法人化し、多くの負債を抱えるリスクを背負ってまで生産規模を拡大することを懸念する声が多かった。私の2人の子供がそれぞれ目指す道を見つけていて、後を継がないことがはっきりしていたからだ。

それでも私には、後継者がいないという不安より「世界に誇れるサクランボを生産し、安定経営のできる農業を目指す」という夢が勝っていた。魅力ある経営体であれば優秀な後継者がいずれ現れるはずだというあてのない思いを抱きつつ、同時に「本当に現れるだろうか」と悩み続けてもいた。

そんな中、1人の農業研修生が入社してきた。寒河江市出身で、東北大学大学院農学研究科を修了した安食政史君(26)だ。

今年5月まで2年間の研修期間中、安食君は早朝から屋外での作業に黙々と取り組み、パソコンを使って生育状況などのデータ管理を進めた。その姿を間近で見て、私は「これまで形作ってきた多田農園を継承し、発展させることができる能力を持った人材だ」と考えるようになった。

「後を継がないか」。正式に本人にそう伝えたのは、7月中旬のことだった。